

## ダニエル書10章「天における戦い」

### 1A 栄光に輝く御使い 1-9

#### 1B 三週間の断食 1-4

#### 2B キリストの御姿 5-8

### 2A ダニエルへの言葉 10-21

#### 1B 立ち向かうペルシヤの君 10-14

#### 2B 励ます御使い 15-21

## 本文

ダニエル書 10 章を開いてください。私たちは、ダニエルの見る幻で最後の幻に入ります。これまで、7 章でダニエルが、海から出て来る四頭の獣の幻を読みました。8 章において、雄羊と雄山羊の幻を見ました。そして 9 章で、私たちは、ユダの民と聖なる都について、それが回復するのが七十週であることを読みました。それぞれの幻と夢は、一つの方向性を示しています。主が、ダニエルの民、ユダヤ人をどのように異邦人の支配から救い出し、またエルサレムの都を回復させるのか、ということです。少年の時に捕え移されたのですから、彼にとってそれは大きな重荷であったでしょうから、当然のことです。そして主ご自身が、その御名の栄光のために、ご自分の民を救われることも、またご自分の住まいに御顔を輝かされることも強い関心をお持ちであったはずで

そして私たちは、ダニエルが神の言葉をよく読む人であることを知りましたが、それだけでなく、祈りに専念する人であることを読んでいます。彼の悔い改めの祈り、執り成しの祈りには多くを私たちは学びました。そして 10 章は、その祈りの奉仕というものがいかに大切か、祈りということそのものが私たちの主への中心的な奉仕であることを知ります。

### 1A 栄光に輝く御使い 1-9

#### 1B 三週間の断食 1-4

10:1 ペルシヤの王クロスの第三年に、ベルテシャツアルと名づけられていたダニエルに、一つのことばが啓示された。そのことばは真実で、大きないくさのことであつた。彼はそのことばを理解し、その幻を悟っていた。

ダニエルがついに、「ペルシヤの王クロス第三年」にまで生きていたことがここに書いてあります。彼は、イスラエルの民がエルサレムから引き抜かれていた間、捕え移されていた間、その外国の地で主に仕えるという大きな使命を、神から与えられていた人でした。1 章は、彼が友人三人と共に、ネブカデネザル王の元年から仕えるようになったことが書き記されていきました。そして、彼は、1 章 21 節によると「クロス王の元年までそこにいた。」とあります。クロス王は紀元前 536 年

頃に統治を始めました。そしてユダヤ人たちに、エルサレムに帰還すること、彼らの神の宮を建てることを布告します。主が、エレミヤによって語られた預言を成就させるまでの間、異国の地で主に仕え、主に対して願い求める僕を求めておられたでしょうし、ダニエルはそのことを忠実に果たしました。

しかし、彼はエルサレムへの帰還民と共に戻りませんでした。今はすでにクロス王の第三年になっています。紀元前 534 年辺りでありましょう。彼はもう 90 歳近いです。その老齢ということがあって、そこに残っていたのでしょう。ちなみに総督ゼルバベルと大祭司ヨシュア率いるユダヤ人の帰還民は、離散しているユダヤ人の中ではごく少数でありました。多くの人々が未だ、離散の地に残っていました。そして、9 章で預言されていたように、エレミヤの預言したユダヤ人帰還の約束は、必ずしも帰還後、バラ色を約束していたわけではありませんでした。むしろ、困難が続き、荒らす忌むべき者が現れるという大きな試練が待ち構えていたのです。

そして今、彼には更なる使命が与えられていました。主から新たに幻を受け取り、それを書き記すことです。「一つのことばが啓示された。そのことばは真実で、大きないくさのことばであった。」ダニエルに、神のことばが啓示されました。それがあまりにも私たちの理解を超えたものであり、信じがたいことであるので、「そのことばは真実で」と念を押しています。かつてヨハネが黙示録において驚くべき幻を示された時に、「これは神の真実なことばです。(19:9)」と天使から念を押されていました。私たちにとっても、驚くべき言葉があれば、それがいくら聖書に書かれていても、「どうなのかな？」と疑問に思ってしまうかもしれません。けれども、だからこそ「真実な言葉である」と念を押してくれているのです。そしてその驚くべき内容は、「大きないくさ」です。これは、「長くて、困難が多いこと」というように訳すこともできます。これから、ペルシヤだけでなくギリシヤの王たちの戦い、そして終わりの日における世界大戦、そしてこれらの長い歴史の中で、ユダヤ人たちが受ける試練と最後の救いについて啓示を受けます。ところで、「ベルテシャツアルと名づけられていた」と自分のことを書いていますが、これはバビロン時代から使われていた正式名であったので、自分の書き記していることが、自分自身が書いたことを明確にさせているのでしょう。

そして、ダニエルは「そのことばを理解し、その幻を悟っていた。」と言っています。彼の悟りには、進展があります。7 章において四つの獣の幻を見た時は、「7:28 私、ダニエルは、ひどくおびえ、顔色が変わった。しかし、私はこのことを心に留めていた。」と言いました。8 章において雄羊や雄山羊、そしてその後のアンティオコス・エピファネスについての預言を受けた時に、「8:27 私、ダニエルは、幾日かの間、病気になったままでした。その後、起きて王の事務をとった。しかし、私はこの幻のことで、驚きずくんでいた。それを悟れなかったのである。」このように、怯えたり、病気になったりしていました。悟れなかったからです。けれども、彼はエレミヤ書を手にして、七十年の捕囚の帰還を知り、そして悔い改めの祈りを捧げました。すると、ガブリエルが再びやってきて、彼に七十週という期間を伝えてくれたのです。このようにして、初め彼は、かろうじて心に留めることがで

きたけれども、悟ることができなかったこれらの言葉は、今は、全く完全とは程遠いけれども、大体的とことで悟ることができたのです。

思えば、イエス様が甦られてから行われたことも、これと同じだったような気がします。十字架に付けられるにご自身が十字架に付けられると宣言されても弟子たちには、混乱と困惑が広がるばかりでした。そして十字架刑の時には躓きました。しかし、甦られて弟子たちに語られる時は、「ルカ 24:44 わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」ということで、聖書全体からご自分のことについて教えられたのです。信じがたいことであっても、悟ることが鈍くても、主は忍耐して彼らに教え、建て上げていかれました。そして今度は弟子たちが、神の救いのご計画全体を他の人たちに伝えることができるようにします。パウロがエペソの長老たちを集めて、「神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。(使徒 20:27)」と言いましたね。

10:2 そのころ、私、ダニエルは、三週間の喪に服していた。10:3 満三週間、私は、ごちそうも食べず、肉もぶどう酒も口にせず、また身に油も塗らなかつた。

ダニエルは、丸三週間、喪に服していました。そして、完全な断食ではないですが、ごちそうやパン菓子のようなものを避け、また体を元気に見せる身だしなみのような油塗りもしませんでした。悲しみを表していたのです。これはやはり、帰還民からの知らせが入っていたからでしょう。エズラ記とネヘミヤ記、またハガイ書とゼカリヤ書もそうですが、バビロン捕囚の間に、エルサレムは瓦礫の山であり、荒れ果てており、どこから手をつければよいか分からない状況でありました。紀元前 516 年に神殿はなんとか再建されていますが城壁はなく、紀元前 445 年にはネヘミヤが、エルサレムの惨状を聞いて泣いて祈っています。

エレミヤの預言によって、神は災いの計画ではなく、将来と希望を与えるものであるという神の約束を読んでいたにも関わらず、それがそのように実現しているように見えない状況でありました。ここに信仰の戦いがあります。また忍耐が試されます。

10:4 第一の月の二十四日に、私はヒデケルという大きな川の岸にいた。

幻を受けた時が記されています。「第一の月の二十四日」です。過越の祭りが十四日にありますから、彼は過越の祭りの間、その祝いの祭りの間もエルサレムのことを思って、悲しんでいたのでしょう。過越の祭りはエジプトからの救い、脱出を意味していましたが、今やバビロンからの救い、奴隷からの解放、そして帰還を果たしており、第二の出エジプトとなっていたのですから、大いに喜べるはずなのですが、エルサレムの状況が状況であり、これでは本当の意味での解放ではないと思っていたことでしょう。

そして幻を受けた場所は、「ヒデケル」という川の岸辺です。ティグリス川のことです。ユーフラテス川からそう遠くはありません。彼は 8 章の幻では、ウライ川のほとりにいたのですが、それは幻の中でした。ここでは違います、彼は実際に川の岸にいます。そして彼は、確実にペルシヤ帝国の都シュシャンから離れています。おそらく、ダニエルは離散したユダヤ人たちがいたところに近い所にいたのでしょう。エゼキエルは、ユーフラテス川の支流のケバル川のほとりで幻を受けていました。そして、後の学者エズラはユダヤ人たちを集め、帰還をしようとしています、アハワ川という、これまでユーフラテス川の支流のところにいました。彼が他のユダヤ人たちと共にいたという可能性はあります。そして、ダニエルはこの川の岸辺で御使いにこれから会います。12 章においても、川の岸辺で預言を受けている彼の姿が出て来ます。幻はずっとヒデケル川のところで受けていました。

## 2B キリストの御姿 5-8

10:5 私が目を上げて、見ると、そこに、ひとりの人がいて、亜麻布の衣を着、腰にはウファズの金の帯を締めていた。10:6 そのからだは緑柱石のようであり、その顔はいなずまのようであり、その目は燃えるたいまつのものであった。また、その腕と足は、みがきあげた青銅のようで、そのことばの声は群集の声のものであった。10:7 この幻は、私、ダニエルひとりだけが見て、私といっしょにいた人々は、その幻を見なかったが、彼らは震え上がって逃げ隠れた。

ダニエルと他に何人かが歩いていましたが、ものすごい幻を見ました。他の人たちは幻そのものを見ませんでした、その気配はしっかりと感じ取ることができました。震え上がって逃げ隠れています。ちょうど、サウルがダマスコに行く途上で、復活されたイエス様が現われた時と似ています。同行していた人は、音は聞こえましたが、声は聞こえませんでした。またその御姿も見えませんでした(使徒 9:7,26:14)。さらに、イエス様が復活されたその墓の石の上に、御使いが座りましたね。その時もローマ兵は「恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。(マタイ 28:4)」とあります。しかし女たちは、御使いと話することができます。これと似ているでしょう、たとえどんなに厳かな奇跡の場にいたとしても、見ることのできる人、聞くことのできる人は、主との人格的な関係を持っている人たちだけだ、ということです。

そして、この御使いですが、天の御座にある栄光をそのまま表しています。亜麻布の白が代表している白さ、金の帯が代表している輝き、そして緑柱石は栄光の輝きと貴さを示しています。顔の稲妻と燃える松明のような目は、神の威光と全てを見通している姿です。そして、腕と足の青銅は神の裁きを表しています。そして黙示録 1 章を読むと、イエス・キリストご自身ではないかと思われれます。天からの神の本質の完全な現れです。ヨハネもダニエルと同じようにその幻を見て倒れて、死んだようになった経験をしましたが、こう書き記しています。「それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のものであった。その足は、炉で精練されて

光り輝くしんちゆうのようであり、その声は大水の音のようであった。また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。(13-16 節)「ダニエルに対して現れてくださった主が、再びヨハネに臨まれたのではないかと考えられます。

しかし、「そうではない、ひとりの力強い御使いであってイエス・キリストではない」という見方もあります。なぜなら 13 節に問題を感じるからです。「ミカエルが私を助けに来てくれた」とあるからです。全能の神であられるイエス・キリストが、墮落した天使の抵抗に打ち勝つことができず、ミカエルの助けを必要とすることは考えられない、と考えるからです。確かに、天使について聖書の中にある姿をじっくり調べると、その栄光は主ご自身そのものではないかと錯覚してしまう程の輝きがある時がありますが、主ご自身ではありません。黙示録で最後の七つの災害、七つの鉢を持っている御使いは、「きよい光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。(15:6)」とあります。イエス・キリストご自身の御姿と似ていますが、主ご自身ではありません、御使いです。そして、使徒ヨハネ自身が天使を礼拝しようとする過ちを犯しました。「そこで、私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると、彼は私に言った。『いけません。私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じもべです。神を拝みなさい。イエスのあかしは預言の霊です。』(黙示 19:10)」ですから、非常にイエス・キリストに似ていながら、実は他の天使であったということもあり得ます。

けれども、やはりこの人はイエス・キリストご自身だという解釈もできます。13 節で話している人は、5,6 節の人物とは異なるとも考えられるからです。10 節に「一つの手が私に触れ」とあります。この人物が必ずしも、5,6 節の人物とは限らないのです。同じように、16 節に「人の姿を取った者」とありますが、これも他の天使だとする解釈です。確かにここに複数の天使がいることを 12 章で確認することができます。12 章 5,6 節にこうあります。「私、ダニエルが見ていると、見よ、ふたりの人が立っていて、ひとり川のこちら岸に、ほかのひとは川の向こう岸にいた。それで私は、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人に言った。」二人の天使が川の両岸にいて、そして川の水の上に亜麻布の衣を着た方がいます。したがって、おそらくは、ダニエルが見た第一の人はイエス・キリストご自身であり、他に二人の天使がいて彼に話しかけている可能性があります。イエス様は、旧約の時代には「ヤハウエの使い」として何度も現われておられます。多くの「主の使い」とありながら主ご自身が語られ、そして主の使いを見た人は、「私は神を見た」と告白しているからです(例:士師記 13 章)。

10:8 私は、ひとり残って、この大きな幻を見たが、私は、うちから力が抜け、顔の輝きもうせ、力を失った。10:9 私はそのことばの声を聞いた。そのことばの声を聞いたとき、私は意識を失って、うつぶせに地に倒れた。

幻にあるその姿を見て、衝撃を肉体に受けました。そして声を聞いたなら意識を失って、倒れて



しまいました。聖書の中には、他に、天にあるものの幻を見る特権にあずかった人々がいます。既に話した使徒ヨハネがそうです。またイザヤもいます。彼は主の御座の幻を見て、「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。(6:5)」と言いました。肉体の内にいる者が天に触れるということそのものが、ものすごい衝撃を受けます。私たちはダニエルがいかに直ぐな人であったか、神を愛した霊的な人であったかを読んできました。けれども、私たちの見る聖さと正しさと、天におけるそれはとてつもない大きな開きがあるのです。ダニエルでさえ、地上の肉体にある汚れと罪から免れていることはなかったのです。

私たちが神に出会う、ということはこういうことです。イエス様が山上の垂訓において八つの幸いについて語られましたが、その始めは「心の貧しい人」でした。「天の御国はその人のものだからです。(マタイ 5:3)」と言われました。ある牧師がこの箇所について次のように説明しました。「この『貧しい』は窮乏状態です、何も持っていない人のことを言います。あなたの心で大事だと思っているものが全て剥ぎ取られた時、あなたは幸いですということです。私たちの誇り、自尊心がこれを認めません。私たちにとっては不可能な業です。」この貧しさを知って初めて天を味わうことができます。言い換えれば、天に触れたときに私たちは、自分の内には何も良いものがない、私は窮乏状態だと初めて告白することができます。表面的に「嘘をついた」「人をねたんだ」というような罪によって罪人という認識を持つのではなく、自分の存在そのものが罪人であることを悟ることができます。真実なへりくだりは、主ご自身に見えることによるのみ訪れると言われます。

## 2A ダニエルへの言葉 10-21

### 1B 立ち向かうペルシヤの君 10-14

10:10 ちょうどそのとき、一つの手が私に触れ、私のひざと手をゆさぶった。10:11 それから彼は私に言った。「神に愛されている人ダニエルよ。私が今から語ることばをよくわきまえよ。そこに立ち上がれ。私は今、あなたに遣わされたのだ。」彼が、このことばを私に語ったとき、私は震えながら立ち上がった。

ここで、「一つの手が私に触れ」ています。彼を励まし、力づけているのですが、ダニエルは恐れ震えおののき、かろうじて立ち上がっています。彼は 15 節でも、そして 18 節でも、同じように振られています、それでようやく、御使いからの神のことばを聞くことができる態勢が整います。

ここで御使いたちが、彼に「神に愛されている人ダニエルよ」と言っています。まさにダニエルが、自分はもうだめだ、終わってしまっていると思っているその時に、主は、「あなたは愛されているのだ」と言われるのです。そしてこれから、真理の書に記されている将来の事柄を彼に示されるのです。主はご自分の愛と憐れみ、恵みによって私たちを召してくださいます。ペテロが、自分の罪深さをはっきりと知って、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから。(ル

カ5:8)と言いました。ダニエルやヨハネのように、栄光の光輝くイエス様の姿をペテロは見ませんでした。けれども、夜通し漁をしたのに一匹もとれなかったところ、大漁を与えられたことによって、イエス様の栄光の姿を目の当たりにしたからです。イエス様は、ペテロがもうだめだと思ったその時に、「こわがらなくてもよい。これからの後、あなたは人間をとるようになるのです。(5:10)」と言われました。

主は、ご自分の愛される者に、ご自分のなされることを明かされます。その一人がアブラハムです。三人の旅人がアブラハムの所に訪れて、そして二人はソドムの方に発ちました。残された一人は主ご自身であり、イエス・キリストですが、こう考えられました。「わたしがしようとしていることを、アブラハムに隠しておくべきだろうか。(創世 18:17)」ヤコブ書またイザヤ書(41:8)に、アブラハムが「神の友(2:23)」と呼ばれています。親しい友に隠し事をしたくない、全てを話したいという神の願いです。イエス様は弟子たちに「あなたがたはわたしの友だから、父から聞いたことを、あなたがたに知らせたのです」ということを言われました(ヨハネ 15:14-15)。主がアブラハムに知らせたことは、ソドムを火で裁くことでした。これは、到底アブラハムには受け入れられませんでした。そこに自分の甥ロトが住んでいるからです。それで彼は必死にソドムの町のために主の前で執り成しました。主は、ものすごい大きな寛容でその町を赦すと約束されました。十人の正しい人がいれば、町全体を赦すと言われたのです。けれども残念なことに十人も正しい人はいませんでした。けれどもロトについては、彼が逃げるまで裁きを待っていてくださったのです。

ダニエルがこれから受ける幻も同じような重い内容です。大きな戦についてのことであり、そして終わりの日に至るものであり、その中でイスラエルの民が大きな試練を受ける内容です。そのことを伝えることは、それなりの耳がなければ聞き入れることができません。しかしそのことを、主に愛されているという保障の中で、安心感の中で初めて聞くことができます。

10:12 彼は私に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだらうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。10:13 ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき、10:14 終わりの日にあなたの民に起こることを悟らせるために来たのだ。なお、その日についての幻があるのだが。」

ダニエルは、9章から「あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだらうと決め」ということを行なっていました。エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が七十年であると定められていたので、それで彼は悔い改めと嘆願の祈りを捧げました。今、クロス王によって帰還命令が出たのにも関わらず、帰還民が困難に面しているのを知って、それでさらに心を定めて、なぜなのかを悟ろうとし、主の前に悔い改め、悲しんでいたのでしょうか。主は、これをよしとされていました。御

心とされてきました。ゆえに、御心になかった祈りですから、その祈りを捧げたときから聞いておられました。

しかし、墮天使の一人であるペルシヤの君がそれを妨げたのです。午前礼拝で、私たちは祈りにおける霊の戦いについて見てきました。私たちにとっては、教会としてパウロが祈りの要請をしたように、福音宣教また教会の建て上げにおいて、霊の戦いの祈りを必要としています。テサロニケの人たちに送った第一の手紙には、サタンが妨げたとパウロがはっきりと言っている箇所があります。「2:18 それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちを妨げました。」テサロニケの人たちはイエス様を信じましたが、パウロは彼らを育て、養う期間が全く無いままに、迫害の手が伸びてきたのでそこから逃げました。そしてテサロニケの人たちも迫害と困難の中にいました。パウロの一行は何とかして、彼らを信仰の中に堅く立てられるように願って、引き続き彼らに届こうとしたのですが、できませんでした。このように、福音を語る事、また福音にしっかり立つように励ますことを、サタンは何とかして阻止しようと戦いを挑みます。

ですから、祈ることは本当に大切です、祈りは最大の武器です。パウロは、エペソの教会に対しても、コロサイの教会に対しても、そしてテサロニケの教会に対しても、いつも「私たちのために祈ってください。主のみことばが、広がりますように。」と祈りの要請をしていました(2テサロニケ 3:1)。主の働きにおいて、このような霊の戦いがあるからです。

そして、「第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれた」と御使いが言っています。第一の君というのは、天使長、あるいは天使の頭のことです。天使は、軍隊のような、はっきりとした指令系統があります。聖書では、天使のことを「軍勢」と呼んでいます。8章において、大祭司や神に仕えている人々のこと「天の軍勢」「星の軍勢」と呼びました(8:10)。それは、彼らを守り、見張っている天使の軍勢がいたからです。主ご自身が、「万軍の主」と呼ばれているのはそのためです。をその指令系統の中で彼らは動いているので、ミカエルは中でも高い位にいる者です。ミカエルは戦う天使であり、イスラエルの民、神の民のために戦う天使であることが分かります。「12:7-8 さて、天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦したが、勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。」ミカエルはまた、モーセが死んだその遺体について、サタンと言い争っていました。「ユダ 9 御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、「主があなたを戒めてくださるように。」と言いました。」

そして、この御使いが来たのは、「終わりの日にあなたの民に起こることを悟らせるために来たのだ。」ということです。ダニエル書は、終わりの日についてどうなるかを示している書物ですね。ネブカデネザルに対して、ダニエルが、「2:28 この方が終わりの日に起こることをネブカデネザル



王に示されたのです。」と言いました。ガブリエルがダニエルに、「8:19 私は、終わりの憤りの時に起こることを、あなたに知らせる。」と言いました。11章の幻では、ダニエルにとって近未来である、ペルシヤのこれからのことと、ギリシヤの王たちの戦いについても語りますが、終わりの日に起こるところまでの結末も御使いは語ります。私たちは、今、この時に何をしなければいけないかを知る事、その御心はとても大切ですが、終わりの日を知ることもとても大切であることを知ります。いや、終わりの日を知るからこそ、今のこの時を正しく生きることができます。今の目に見えることに左右されるのではなく、神の視点で、永遠の視点で物事を見極め、御心を選び取ることが出来るからです。

## 2B 励ます御使い 15-21

10:15 彼が私にこのようなことを語っている間、私はうつむいていて、何も言えなかった。10:16 ちょうどそのとき、人の姿をとった者が、私のくちびるに触れた。それで、私は口を開いて話し出し、私に向かって立っていた者に言った。「わが主よ。この幻によって、私は苦痛に襲われ、力を失いました。10:17 わが主のしもべが、どうしてわが主と話せましょう。私には、もはや、力もうせてしまい、息も残っていないのです。」

先に御使いが「恐れるな。ダニエル。」と力づけましたが、彼の言葉を聞いているうちにダニエルは再び力を失いました。うつむいて何も言えなくなったので、再び御使いに彼が話せるように彼のくちびるに触れました。イザヤが神の御座の幻を見た後も、祭壇からの燃える炭で御使いが彼の口に触れました。「イザヤ 6:6-7 すると、私のもとに、セラフィムのひとりが飛んで来たが、その手には、祭壇の上から火ばさみで取った燃えさかる炭があった。彼は、私の口に触れて言った。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」」主が聖めてくださらなければ、何も語ることはできないからです。私たちがキリスト者として、証しのことば、伝道、神のことばを取り次ぐ時は、いつも、この感覚があることでしょう。神の聖なる言葉を取り次ぐのですから、ただ神の罪の贖いの手によって、自分の唇に触れてくださったからこそ、こうやって話せるのだという感覚です。

10:18 すると、人間のように見える者が、再び私に触れ、私を力づけて、10:19 言った。「神に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」彼が私にこう言ったとき、私は奮い立って言った。「わが主よ。お話してください。あなたは私を力づけてくださいましたから。」

主が何度も何度も、恐れるな、安心せよと励ましてくださったから、それで彼は主の言葉を聞く力が与えられました。いかに私たちが、神の愛と憐れみを必要としているか思われます。このように、私たちに神は大きなことを任せられます。信仰生活を送るということ自体も、大きな務めとも言えるのではないのでしょうか？自分は今もう語ることもさえない、祈ることもさえないと、大いなる神を思う時にダニエルのようにうつむいてしまうかもしれません。しかし、そこで天使が助けてくれます。

その新たな力を与えてくれるような霊的体験を与えてくれます。自分が本当にだめだと思ったその瞬間に、主の憐れみによって立ち上がることが出来るようして下さいます。

実は主ご自身が、御使いによって助けられました。覚えていますか、悪魔の誘惑を受けられた後に、御使いが仕えていました。「マルコ 1:13 イエスは四十日間荒野にいて、サタンの誘惑を受けられた。野の獣とともにおられたが、御使いたちがイエスに仕えていた。」そして、ゲッセマネの園においても、御使いが助けていました。「ルカ 22:41-44 そしてご自分は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」すると、御使いが天からイエスに現われて、イエスをカブけた。イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」御心に従う、自分を神に任せるといことがいかに壮絶な戦いであるか、主イエス様のその祈りの中に表れています。しかし、その時に御使いが仕えてくれることが分かります。ユダの荒野での誘惑の時もそうですが、ゲッセマネの園の背後では闇の力が既に働いていたことでしょう。けれども、ちょうどペルシヤの君に対してミカエルがやってきたように、主の祈りのために戦い、仕えていた御使いがいたのです。

10:20 そこで、彼は言った。「私が、なぜあなたのところに来たかを知っているか。今は、ペルシヤの君と戦うために帰って行く。私が出かけると、見よ、ギリシヤの君がやって来る。10:21 しかし、真理の書に書かれていることを、あなたに知らせよう。あなたがたの君ミカエルのほかには、私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者はひとりもない。

本来、この御使いはペルシヤの君との戦いをしていました。そしてペルシヤの君の次には、ギリシヤの君がやって来ます。午前礼拝でお話ししましたが、その相克の中でペルシヤの王たち、またギリシヤの王たちの戦いがあったのです。そして、その中でミカエルが戦います。権力者たちの間に挟まれていた時に、神の民のために仕え、戦っている御使いがいるのです。そして、終わりの日にはユダヤ人が絶滅してしまうのではないと思われるような苦難が来ます。しかし、ミカエルが助け、そして主キリストご自身が戻ってきてくださるのです。

しかし、このような戦いがある中で、言葉を伝えるために御使いがダニエルの所に来たのです。それが、「真理の書に書かれていることを、あなたに知らせよう」というところです。イエス様は「真理はあなたがたを自由にします。(ヨハネ 8:32)」と言われましたが、時にその真理は私たちの心を引き裂きます。知ることによって自由にされるのですが、その知識は時に辛く、苦々しく感じる時もあります。ダニエルのように、押しつぶされてしまいそうな重圧感に悩まされることもあるかもしれません。人が罪を犯して、死後に神の裁きが定められていること、この真理に私たちは押しつぶされそうになったことがあるでしょうか？けれども、そこからだえ苦しむような祈りが始まります。この愛する人をお救いくださいという祈りが始まります。そしてその祈りを御使いが助けてくれます。